教心寺寺報　　サーサナとはパーリ語で「教え」の意味です

サーサナ

第68号　仏暦2567（西暦2025）年6月20日

仏教は偶像崇拝か（1）

2001年3月にイスラム原理主義勢力のタリバンがバーミヤン大仏を爆破したことを覚えていらっしゃる方も多いでしょう。イスラムの教えでは、偶像崇拝は絶対に認められず、仏像は偶像に他ならない、というのが理由でした（少なくとも表面的には）。

仏教はほんとうに偶像崇拝の宗教なのでしょうか。たしかに仏像を造って拝むという行為があります。ただし、初期の仏教では仏像というものは存在していませんでした。仏像を造り始めたのはガンダーラ（現在のパキスタン）の地において、ギリシャ彫刻の影響を受けたことに由来します。釈尊滅後500年くらいの時代です。それまで（特に在家の）仏教徒が礼拝の対象としていたのは法輪や仏足石や菩提樹などでした。法輪というのは、教心寺本堂にも法輪旗を掲げていますが、8本の輻を持つ車輪で、八正道（正見、正思惟、正語、正業、正命、正精進、正念、正定）を象徴しています。ここで「象徴」ということが大切です。つまり、法輪そのものはあくまでもモノあるいは図案であって、それ自体に聖性があるわけではありません。

これは仏像にも同じことがあてはまります。親鸞聖人は、仏には「法性法身」（ほっしょうほっしん）と「方便法身」（ほうべんほっしん）の別があるとして、「法性法身にはいろもかたちもないのだから、見たり聞いたり言葉で表現することはできない」、「この法性法身（如）が衆生救済のためにかたちをあらわし、阿弥陀仏という方便法身としてすがたを示された」と説明されています。「方便」というのは決して「うそ」ではなく、「巧みな手段」という意味です。つまり、私たちは何も存在しないように見える空間において礼拝崇敬を行うことは困難なのであって、やはり何らかの目に見えるすがたが必要なのでしょう。阿弥陀仏の図像を「方便法身の尊形」といいます。

（次号へつづく）

全日本仏教会声明「戦後８０年を迎えて」

本年は、第二次世界大戦が終結して80年の節目をむかえます。

戦争において犠牲となられた世界の方々に対し、心より弔意を表するとともに、戦争を経験し苦しい思いをしている方や、今もなお苦しめられている方々のご心痛のほど、お察し申しあげます。

かつて日本も、戦争を推し進めていった事がありました。日本国民はこの国家方針に従い、いのちの尊厳を提唱すべき私たち仏教徒の中には非戦を貫いた者もおりましたが、戦争に加担・協力した事実がありました。

戦争で多くの方々が亡くなり、それは未来ある一人ひとりのいのちであったことを忘れてはなりません。

戦後40年の1985年、西ドイツのヴァイツゼッカー大統領が自国の過去を振り返りながら行った演説で、「過去に目を閉ざす者は結局のところ現在に対しても目を閉ざすことになる。非人道的な行為を心に刻もうとしない者は、またそうした危険に陥りやすい」と世界に警鐘を鳴らしました。それからさらに40年を経た今、私たちは改めてこの言葉を深く受け止める必要があります。

戦後生まれの人口が９割近くを占め、日本では戦争が遠い過去の話になりつつあります。戦時下の極限状態においては、非人道的行為さえ正当化されました。

戦争を体験した祖父母、その話を聞いた家族、体験者との密接な交流から聴いた話を受け継ぎ、残された資料などから、記憶や記録を明らかにして戦争の悲惨さを想像する。そうした中で、私たちにとって戦争は二度とあってはならないことと改めて思い起こさなければなりません。

仏陀のみ教えには次のようにあります。

> 何びとも他人を欺いてはならない。たといどこにあっても他人を軽んじてはならない。悩まそうとして怒りの想いをいだいて互いに他人に苦痛を与えることを望んではならない。（スッタニパータ 148偈）
> あたかも、母が己が独り子を命を賭けても護るように、そのように一切の生きとし生けるものどもに対しても、無量の慈しみのこころを起こすべし。（同 149偈）
> また全世界に対して無量の慈しみの意を起こすべし。上に、下に、また横に、障害なく怨みなく敵意なき慈しみを行うべし。（同 150偈）

仏教徒である私たちは、戦争という過ちを再び繰り返されることがないよう、これからも世界平和であり続けることを願い、先達への感謝を忘れずに、仏陀の和の精神を基調とし、世界平和の進展に寄与してまいります。

2025(令和7)年5月15日

公益財団法人 全日本仏教会理事長　**日 谷 照 應**

法要行事について

各法要・行事に必要な勤行本は、お持ちでない場合は当寺より進呈または貸与いたします。念珠は必ずご持参ください。また肩衣の着用を推奨します。

八月　盂蘭盆会（うらぼんえ、お盆）

もともとは、釈尊の弟子の目連尊者が、餓鬼道に堕ちた母を救うために、安居（集中講義）の終わる7月15日に、大勢の出家僧侶に飲食物の供養を行なったことに由来する行事です。

❖日時　　8月13日（水）午前8時～9時
❖内容　　勤行（和訳阿弥陀経、正信偈同朋奉讃）、法話（住職）
❖持ち物　勤行本（『抄訳佛説阿弥陀経』『正信偈同朋奉讃』）

盂蘭盆会について個別（家族単位）でのお勤めをご希望の場合は、次のいずれかにより予約して下さい。

1. 本堂でのお勤め
   8月14日午前8時より正午まで、15分刻みでご希望の時間を指定していただきます。先着順です。16家族様まで。
2. 自宅の御内仏前でのお勤め
   13日（午前・午後・夕方）、14日（午前・午後・夕方）、15日（午前・午後・夕方）のうちのいずれかの時間帯を選んでください。午前とは9時から12時まで、午後とは1時から4時まで、夕方とは5時から7時までをいいます。これ以外の日時は応相談。

九月　秋彼岸会

彼岸とは、覚りの世界＝涅槃のことです。浄土真宗では「阿弥陀仏の浄土」でもあります。真宗では伝統的に、人が亡くなることを「お浄土に還る」と言い習わしてきましたが、お彼岸は亡き人を偲ぶと同時に、亡き人のことばに耳を傾ける大切な期間でもあります。

❖日　時　　9月25日（木）午後2時～4時
❖内　容　　勤行（観無量寿経訓読、正信偈）、法話
❖持ち物　　勤行本『真宗法要聖典』
❖法　話　　当寺住職

十月　報恩講（ほうおんこう）

報恩講とは、浄土真宗の宗祖・親鸞聖人（1173-1262）の祥月命日（11月28日）にあたって、その前後に勤められる法要です。親鸞聖人が亡くなられた日に仏法を聴く集いを開いて、自らの信仰を確かめ学び直そうという人たちが集まりました。この集いを「講」といいます。そして、和讃に「如来大悲の恩徳は　身を粉にしても報ずべし　師主知識の恩徳も　骨をくだきても謝すべし」とうたわれるように、仏祖への報恩謝徳の集いでもあります。

❖日　時　　10月29日（水）午前10時～午後3時
❖内　容　　午前：勤行（文類偈・念仏讃・回向）、御俗姓拝読、法話
　　午後：勤行（正信偈・念仏讃・回向）、法話
❖持ち物　　勤行本『報恩講勤行テキスト』
❖法　話　　前田和丸師（一心寺前住職）
❖記念品　　法語カレンダー、教化施本

ユニセフ募金

4月30日、皆様からお預かりした浄財16,080円を公益財団法人・日本ユニセフ協会へ振り込みました。累計では364,989円になりました。
皆様のご協力に感謝申し上げます。

生活の中の仏教用語（3）

冗談

もともと仏教で十悪業とされているものの一つに「綺語」（きご）があります。無意味で無益な言葉、うわべを飾った不誠実な言葉、という意味です。お世辞もこれに含まれます。要するに、無駄なおしゃべりはやめなさい、ということなのです。ここから派生して、仏道修行に関係のない無用の雑談を「冗談」というようになりました。本来は退けるべき行いであったのですが、現代では冗談のひとつも言わない人は煙たがられる存在になってしまいました・・・

真宗大谷派　教心寺（名古屋教区第３０組）
編集発行人　釋眞弋　（山口眞一）
468-0026　名古屋市天白区土原3丁目205番地
電話：052-801-1381　　電子メール：kyosin@nagoya30.net
URL　https://www.nagoya30.net/temple/kyosin/